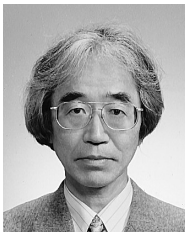
巻頭エッセイ

レトリック偶感



野内良三

ヨーロッパ文化を本当に理解するためにはギリシア・ラテン（古典）とキリスト教を知る必要があるとはよく言われることだ。なるほど，それを裏づけるかのようにこの二つについてはこれまで懇切丁寧に紹介されてきた。もちろん，こうした動きに異を唱えるつもりは毛頭ない。ただ，なにか一つ忘れてはいませんかと言いたい。レトリックだ。私にいわせれば（大胆に単純化すると）ヨーロッパ文化の基底には「対決」のスタンスがある。その「対決」は神対人間（宗教＝契約），人間対自然（科学＝合理主義），人間対人間（個人主義）という形で現象する。この緊張したスタンスこそがヨーロッパ文化を導いてきたのだ。三番目の「対決」に深く関わるレトリックについては，残念ながら応分の応接がなされてきたとは言いかねる。

レトリックは約（つづ）めて言えば，口頭であれ文章であれ言葉を駆使し，人間の理性（左脳）と感情（右脳）に働きかけて，相手を説得する（相手から同意を得る）技術のことである。レトリックの起源が，前五世紀頃ギリシア植民地で頻発した土地所有権をめぐる訴訟にあったということは，注意していいだろう。当時は法律の専門家は存在せず，人々は自分の権利は自分で守るしかなかった。とうぜん口のうまい人間が得をした。それでレトリックの登場という次第である。

どういうわけか，レトリックには昔も今もとかく芳しくない風評がついてまわる。「白を黒と言いくるめる」三百代言だとか，内容空疎な美辞麗句だとか，それはもうさんざんだ。ただ，なんだかんだといわれながらも，不思議なことにギリシア以来二千年以上の長寿を保ってもきたのだ。これにはそれなりの理由があるはずだ。日本人にはあまりピンとこないかもしれないが，レトリックはヨーロッパ人にとって生きてゆく上で大切な技術なのだ。海に囲まれ，比較的同質的な人間の集まりである日本と違って，ヨーロッパは民族や言語や文化を異にする多くの国々が狭い地域に雑居している。他人はなにを考えているのか分からない，自分と違った考え方をしているのかもしれない。他人は「異人」である。だから，自分の考え方を相手にきちんと説明して相手から理解してもらう必要がある。レトリック（説得術）が需（もと）められるゆえんである。

明治いらい日本は欧米からさまざまな文物を貪欲に取り入れ，おのれの滋養としてきた。だが，「和をもって貴しとなす」――「個」よりも「集団」の論理を優先する日本的風土ではどうやら説得術の出る幕はなかった，自由民権運動と雄弁術が結びついた短い「政治の季節」をのぞけば。

ところが，である。日本人も最近ようやく「説得」の必要性を感じ始めたらしい。昨今，日本を取り巻く状況は大きく変わりつつある。私たちの身の回りを見渡しても国際情勢に目を転じても「国際化」「個性化」の波はひたひたと押し寄せている。国家から個人のレベルまで誰もが自己を主張する（必要を感じている）。従来のメディアにインターネットも加わり，今では誰もが自由に（手軽に）自己表現ができる。会ったこともない人たちとも情報を交換する。相手に対して自己の立場をはっきりと主張することが求められる。「説得すること」の意味がこれまでになく重要度を増してきたのだ。日本も日本人も変わりつつある，あるいは変わらなければならないということだろう。

ところで，レトリックの勉強をしたことがありますか。

（のうち　りょうぞう・関西外国語大学教授）